



枯尾華 上

伊地知文庫  
文庫20  
342  
1





文庫20  
342

芭蕉翁大人

全部二冊

俳諧 枯尾華

大阪書林

文金堂梓

芭蕉翁秋馬記



とれやのなるをたかから重くおれと  
酒りし心し泉石冷くを納涼の  
地をすはに湿氣をきげくおを福  
と次郎ちげくおれをやうおひ色  
はる腸をつらむらうことおかくもあ  
つた書のうけをむとせまを困窮一乃  
おれくおれをうあ人も便ちのく立ぬと

今年就中を衰なりと歌あへり抑  
以る孤獨貧窮なりと徳業のせむは  
とて此量なり二午條くの門余を  
ひらくも合にふる因と縁との不可思  
後山のありも勘破りて天和と  
年のを深川のその居急火とわたりを  
激しひらり管をうつふまは煙のくちま  
生のひらき是て玉の結のそつ好景と初

とてなまお如火宅の變を悟り無所  
住の心を教りて其次の身其のすま  
甲斐り根をくくしつてゆきのまはみ  
つてたのまはともてれなりと五月下入  
無我とらしむる昔の病と立歸りおとし  
くねえんてうねりて煙の舊州と  
居をあらすむ志も心もゆるめる海  
みもとてつふ乃芭蕉を植り雨中吟

芭蕉世分りて蓋しるるはつゆあふや  
 休らざりし堪困の友志けくうのひも  
 ちのつらき芭蕉道あるよりのよみよのぬ  
 成せりの此圓覺も大巔和尚とより  
 易あらりしをいふしんをよらうしん  
 けらう或時翁うを卦のてみんせ  
 年月時日を古曆の合せう筮考をいふ  
 うあふ華とりの卦のあふしん是をい

ころのるる風く吹き雨も志はゆきて  
 うもあふはた敷く志けく成をいふ  
 じ世なくからりてせのちのたのひ  
 くらとたきあふよのあふしん  
 潜なるんよのあふしん  
 うらうらうらうらうらうらうらうら  
 うら信り聖典の瑞を感るるはら  
 こらうけらうらうらうらうらうら

魚のあかりやねもかきもも懸むき六所  
はくはる橋や舟を極あり塔ありむの  
を待ちと母の浅きやと眼前の奇  
景も推こくをののせちうありあも  
あつかりつむとたまふ聊悲とほ  
る事うさく貞享初めこの秋知利  
きとまむひたれ海やよ一秋の真を  
はのこさ作あきしくくもよふせ

あけりやむきくこの秋あきく茶の  
羽織ひのふきあきくふきくふきく  
あきく風狂くこのあきくあきく  
魚多く鄙のあきをくくく名は  
と向きあきくあきくあきくあきく  
うあきくあきく竹舟あきくあきく  
あきくあきく徳作くあきくのあきく  
あきくあきく近在隣郷く馬あきく

巻  
四

ありあふるもせんは心そのまゝ  
只の一目もぬらむ心氣らう  
衰減して病序のこゝ田みおつて  
とくもいそん其まゝと  
しつゝりゆく幻住庵 後菘子記 義仲寺  
おろす所至る処の風景を心の物のり  
遊へるも年ちり元来混本寺沸頂和尚  
子嗣法してひらり弁禪乃は師といは

一氣鉄鑄生ナいふほひきりも老  
くつほらうあゝ句毎のこゝも  
も自然く山家集の骨髓をほめ  
ありくもやほらもそはたの杜子美と  
もろこやう貧交人よ厚く喫茶の舎  
盟くおろくも宗鑑う酒あも教乃い  
うしつ成る自由躰放狂躰世尊  
口くしつてしも現力之九篤實のちあ

風雅の妙もく白ひゆりもく大極下  
 流も雪もくひるくはるはるの世の世  
 流る島の流るの村も川もくしちちを  
 子ゆりこの能因由も極下兼好二ん  
 西より高野と寂蓮城底の縁ハ宗祇  
 宗長白川と道載のまゝ流るるをもく  
 なる人なる色蕉翁あついでちちち  
 見えらるるくよとくくくくくくくく

そのものもくく 奥のあきたもく十餘年が  
 うち杖と笠と杖とあきたもく十餘年が  
 みる所もくもくもく我胸の中もく祖  
 神のまかりあきとくくくくくくく  
 片も旅の心もあき火地是も慈徳和  
 尚のくくく世もあきく旅もくくくく  
 ゆちのゆちもゆちもみゆるあきくくく  
 あきくよ思も合もくくく遊子もく一





七月晦の夜より病のあはれき泄痢度  
 心けくし物げよ力もなしく手足球々しハ  
 病中の中より去來  
 京より弛ゆるる膳所より正徳の大津  
 たり本節し別丈州平田の李由つる原と  
 あり各惟孫と見たりる歌おをを法あり  
 なるるをもつるも心神の散乱なるる  
 といはれ不詳をさうりてて近くは招

のまはれおの相ははくはくする多々壁を  
 ありて會運を祈る芭お耳に入ける  
 みや心弱よゆちのさうりて

旅の病はこころは枯れをさうりて

あり枯れをさうりてゆちのさうりて  
 やとれははれを奇執ありて風邪乃  
 よよ死んたの乃を切し思ふては梅は  
 〔八月の夜は病を各うけく急し

賀會祈禱の句

落つまわりくちあーて秋集り木節  
風の気足あきまや露のあし去来  
足りあま竹の梅やみそさうい惟茲  
初雪のまきこありん佐古の宮正秀  
沖のるすおまかや雪のいせ之道  
飛よきしりまみつまうり香乳負伽香  
起よき色も嬌いよ湯婆が支考  
あはれや俵まきこあき新を吞舟

峠と浪野のさきなりあ流きんん支州  
日あゆりてん中流新と我の菊し列

夏と生草の笑納く木節り葉を死と  
ゆるあこしねるの實くくしりる  
汗をぬあつて坐臥のいすけらあきもの  
吞舟と舎羅こころらと道うあしりしあ  
あうつ切みこころあつてあつてあつてあつて  
つくあつて他あつてあつてあつてあつてあつて



ちよふとくけりけり病床よりくひの  
いんごの<sup>フモト</sup>懐ちの<sup>フモト</sup>かろふ色乃向ま  
かきしり是年らの深志の通し  
住吉の神の<sup>フモト</sup>日走のあつた新衣守わ  
のうももれつららわくあつた世  
思ひの<sup>フモト</sup>以蟻通の<sup>フモト</sup>神の物とらあよ  
あつた<sup>フモト</sup>是侍ら<sup>フモト</sup>わく<sup>フモト</sup>洞中<sup>フモト</sup>あけ  
うつくしうあつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>

あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>  
膝ら<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>病顔を<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>  
あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>

吹井<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>  
あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>  
あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>  
あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>  
あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>あつた<sup>フモト</sup>

世

此月の比で能くするものなりし常より  
此月よりいよいよ表の思ふところなり  
此後のいよいよなれりあはれし  
なほ業をいよいよしるすかかのもので寝を  
して居申す

くくすふ菜の下乃 寒とみ 夫州  
病中のあはれなり 寒とみ 夫州  
川流していよいよ寒とみ 夫州  
あはれなり 寒とみ 夫州

あはれなり 寒とみ 夫州  
園とて菜飯のいよいよ 夫州  
皆みとみなり 寒とみ 夫州

十二日の申北刻より死絶するは  
睡するもいよいよ物なりけあはれなり  
も櫃み入るあはれ人の用とていよいよ  
らく川舟のいよいよ去來し 夫州  
惟然正秀の舟 夫州

謹

予とてよ十人客の事一袖寒く旅の  
しとらむもひひとほきとたりとあふ  
あ旅をうりては浮縁をうりてか  
ゆら日比のあつりてふゆら  
教をわらひては御潜の光をうりてあひ  
はるると思ひまのうりてあひ  
昔河のうりて今もうりて東南西北の指  
うりてつるの極を定りてあひのうりて

真松島越の白山をうりてあひ  
とあひとつて驚くはうりの歌あひ  
つらもつてあひのうりてあひ  
あひとつてあひのうりてあひ  
とあひとつてあひのうりてあひ  
はくしつてあひのうりてあひ  
礼多信をうりて京大坂大津船所の  
連気折る者ともあひのうりてあひ

巻

ゆるるこころをほのぼのせしめたるもの  
百余人に澤衣そのか智月とし列の事  
ゆいふと著せしむん則長仲寺乃  
直愚上人をけちひふりし門あのか  
引人ら所まかしのようく木る塚乃右め  
たうゆるく土いおとあうちのうらあり  
をる柳もあうらふその墓れらきりあは  
やうそのまのく卯塔をまのひあう垣を

志先みちのくをけを極く名のくを  
平常の風景をこのちる癖ありを  
所らなるく山田上はさうむてく解も  
ちおふのせ溝ゆる舟も記念の記を  
のく一樵旅の廉田家の雁遺骨を流  
上の月みとてはてうらちあうち翁  
ありく七目程くありくくあう  
追善の奥ち幸にあへるハ予しり

くろみあけおを合感して愚るなり紙  
專の紙を残しゆるこ紙もはるけき紙  
のつては我翁を忘るるもん業ハ是を  
回向乃るなりと云ふ

於栗津義仲寺牌位下 晋子書

元禄七年十月十八日 於義仲寺

追善之誂諧

晋子

あふりくを笠下隠るや指をむ  
温石はくくはる市を成るくよ考  
は竹のわたりとくは海山平 丈科  
アとある土の極み多てある 惟存  
つみ控し市の名も此も短 木節  
はふりてりた夕走りた 李由  
森の名をみのりてり月の影 之道



世うけの茶のゆ鶴はく 去来  
あつ身田中おまをよきまひり 曲翠  
旅く 臨く 斤 保をく 正秀  
晴あをよきまひり 肩の物思ひ 即高  
はのらすり色想く くのひ 泥足  
こがはあつ 舟の豆腐をせ 活あつ 列  
あつ 人 色 保あつ 拍  
葺く 葛藩子 句 天氣 合 昌房  
車の休を はく 探芝

世の月の横く 遠く ぬく 川 胡故  
真く 下く 居あつ 牝玄  
菴のま 室い ちあつ 雨 游刀  
あつ へ ち ち 乃 奇 蘇葉  
世のあつ 集のあつ 乃 惜あつ 智月  
多羅のま 立あつ 育あつ 吞舟  
けあつ ちあつ ちあつ 土刀  
お ちあつ 刀 荷 作あつ 卓袋  
四手あつ お 髪あつ ちあつ 美椿

昔子をる娘をねむりのらん 野童  
一衣のそへ未つむ花をを寝せり素聲  
糸の留ちりて糸の酒 万里  
酒風の思のあそ 吹志たう 誅々  
藪くあまうて 雀をる 雀 這萃  
塩賣のつらうある 世筒 許六  
月のぬりてうけ志あふ 絹 四晃  
秋もけ 雀をるをそへ 雀の外多 荒雀  
くあまうて 雀をる 雀 楚江

小屏風の内より雀の乱し 野明  
雪のそへ未つむ花をを寝せり 風國  
福んてりて草鞋をけりて 木枝  
かへ 堂みりて 雀をる 雀 音子  
ひらりて侍氣みハおりて 角上  
は 雀をる 雀 之道  
西遊記とて雀の小村目初て 去来  
梳りて雀をる 雀のくくがり 土芳  
春をる 雀をる 雀のそへ 雀 芝相

ぬらんをききし 如くはあ 卧高  
 才子みよし 持くの心をあはさる 尚白  
 月よかむ 門の井乃垢離 昌房  
 新のあ 遊者よるるもあく 丹野  
 世のあ の 新志ありをあふえ 丈艸  
 飛のよし ちあし ありあ 猿を 惟然  
 養に 粥くらあ ちあ の 川に 天椿  
 小侍あし ころ近よる 堀乃上 正秀  
 從僧く 出る川へ 足は石 田急

三六

目よらるる 葉のあ 所もちろ 朴吹  
 袋の猫あ ちあ ちあ 角上  
 里とハ ちあ 人遠よ 孝の寺 泥足  
 ちあ ちあ ちあ 所刻を 尚白  
 七つ ちあ の ちあ 出さる 舟あ 舟袋  
 二季 ちあ ちあ ちあ 國くの 掛 芝栢  
 内あ ちあ ちあ ちあ ちあ の ちあ 探芝  
 ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ 遊刀  
 ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ ちあ 楚江

三六

ぶらあしの地丸うめく名と舟 魚光  
 社内ん五郎十名り立な〜ん 晋子  
 祈〜〜〜代友林 殿 風國  
 赤ノ溢さ水止情を引け〜 文考  
 乳母と隣く送る啼児 正秀  
 獅子舞の拍子あけある昼下り 文州  
 雨氣乃る〜〜〜〜 昌房  
 在所〜〜〜〜の昔法を〜 即高  
 片町出〜〜 田 之道

ともた〜のは合〜〜〜〜のを 寺来  
 木像〜〜〜〜〜〜〜〜 泥足  
 とき〜〜〜〜〜〜〜〜 尚白  
 なる〜〜〜〜〜〜〜〜 貞袋  
 漣ア我その〜〜〜〜の天 角上  
 控よむ〜〜〜〜〜〜〜〜 牝玄  
 か〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 土芳  
 村〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 芝相  
 暇み〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 這萃

古

五

軍と介しを祀又ぐり物 卧高  
 淵を彫く陸壇の上を過るく 音子  
 孰日あしふく念珠押もむ 正秀  
 夷くの毛ほづらん巨著寒く 文考  
 こすぬく替あ大小の 額 魚光  
 味つきのゆゆ力もわく也 楚江  
 かみ華一の何り 可笑下 游刀  
 ちんちん恨めしきこりほど 風國  
 朝赤く酒をさるる酒の碎 之道

白鳥の陰を暮を子孫せうけ 探芝  
 と河あかりハ天下一 去来  
 飯あわつ内気もあつあつ 尚白  
 叩者も積をみくもく 田危  
 うさ寒よ塚格子の窓ゆき 芝柏  
 文庫をあらは 箱山伏 土芳  
 ほろもあつて五月の目のせさ 惟徳  
 海くも迫よ武庫川ののり 夫州  
 寮あたるあがり鎖をうけさせ 牝玄

思く々怖の奥に戒名と考  
青天のちるさうくむのりしと 去来  
巢のしるさうくむのりしと 正秀

二十一人満座真行大津膳所  
京嗟哉横津伊賀之連衆也各  
感愁眉而不求巧言也

傷亡師終身作句 初七日迄

志はほろもろも十世の泪ふ 京玄珠  
啼うちの相氣をらまのせ 淡徳 僧栗由  
つらげ下り風も寒ふととちる 大津水音  
つるやけり宗祇も寸白おのま 日し列  
りつるも涙の中 塚の系 膳不昌房  
霞の墓をゆるやあを殺す 僧丈州  
了んの時節 そのとん 帰む 去根許也  
用とてみせり終りの世のらん 同波村

墓中より十子あふせのくねり ぞ探芝  
 和席の濁るあふせや船のまゝ 大津楚江  
 如く日着の老のまゝ 菅の糸 望田成典  
 木弓柿やあふせのほし 塚の上 大つ織江  
 日乳のん 塚のりくねりや船のまゝ 日高玉  
 月雪よせよ体中や笈の脚 信千那  
 志け縮子紙子あふせのゆかり 大つ尚白  
 了せ翁のゆかりのゆかり 奥羽塞をめぐりて  
 人こころの呈書をもつてつらつらとを  
 くらりてとあふせのゆかりのゆかり ちんちんあふせ  
 遺物のあふせのゆかりのゆかり ちんちんあふせ

せせせせを回家ゆりやあふせのまゝ 京徹士  
 せせせせの寒と春の色はははは 信角上  
 流法のまゝゆりてまん 墓のまゝ 京野童  
 一とあふせの位をまゝせん 塚のまゝ 日風国  
 身のある色のもつてはははは 信千那  
 悲しきもあふせのゆかりのゆかり 日阜袋  
 我々の色をほりあふせの雑のまゝ 大坂之石  
 石のまゝ 墓もあふせのまゝ 日芝拍  
 墓のゆりて入る悲しきよ 野山小 信文考

八月廿四日晴の飯交の飯所 京春沈

十六日音子を幻住庵中とあり  
あのかくも新といふ椎の舟を  
いませこそく平付をとりて

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

うりくさひさすむら

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

曲翠 正秀 財高 沈足 霊椿 音子

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

あつしや何を力あつて

焼磯神

同荒雀

大坂春舟

ぢ魚光

日回鳥

日游刀

日朴吹

太木枝

ぢ道華



片の波の吹るをさすく土の姿 大津主竜  
 ちりう疎へもろふお探のぬをふ ぢい進平  
 じりーんとしんてえとる塚の表 日伴九  
 依りけし涙みちり守めふ 四和如

二七日朝暮之悼句所と文通

吾々いねい涙の光四かみ山 三々  
 小枝葉やあふよ自らの海うら 尺草  
 みみの目や師よなまのうらもあ 大坂如柿  
 けいこや悲しきうく柳は ぢい北吉

間をさしあてちりる命也村の 日吾我  
 ねのまゑえん世の形やらのま 日松泉  
 げうえんちるあみせん丸は市 日朔巫  
 菊極嘆え記り 弛まらふ 四田裕睦  
 朝日けし涙もあつての塚のま 日重茂  
 おこけし指のまをさす 女素聲  
 なあはしし 聖もえんあやみ 女乃里  
 花もろくせうはもえんあみま 東の惟松  
 和桶のうらま 女可南

舟の目 襟あきけり 酒あ  
 ちりつけをまねし 師と目た  
 木名の目も 侯のしりね  
 カそく 墓うけり 向あふ  
 舟柳りけり 名くう 秋列  
 持たし ちり 秋まの竹の表  
 函殿つて ちり 秋のちりね  
 幻のけり ちり 秋のちりね  
 カあき 獅のあき ちり 秋のちりね

ぞ 徹房  
 日 麻之  
 日 砂上  
 日 蚕鳥  
 向震彩  
 さう来儿  
 小倉雨夕  
 さう有  
 ちり木春

朝の目 襟あきけり 酒あ  
 ちりつけをまねし 師と目た  
 木名  
 カそく 墓うけり 向あふ  
 舟柳りけり 名くう 秋列  
 持たし ちり 秋まの竹の表  
 函殿つて ちり 秋のちりね  
 幻のけり ちり 秋のちりね  
 カあき 獅のあき ちり 秋のちりね

京妻木

二七日伊賀連流追悼句  
 舟の目 襟あきけり 酒あ  
 ちりつけをまねし 師と目た  
 木名  
 カそく 墓うけり 向あふ  
 舟柳りけり 名くう 秋列  
 持たし ちり 秋まの竹の表  
 函殿つて ちり 秋のちりね  
 幻のけり ちり 秋のちりね  
 カあき 獅のあき ちり 秋のちりね

いら玄鹿  
 出岸車来  
 浅井風睡  
 山田雪芝

つらみつら啼つるおちゆく深の鴨  
 六郎うつくえあはれつらつらつら  
 おる深の洞のあはれおのれ  
 中野うつくえあはれつらつらつら  
 ながのねつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら

杉野肥方

尾本菅蘇

井ノ原

高橋

伏見洞木

西沢魚目

毛呂

岸島和

木井華

借<sup>り</sup>まつるおちゆくつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 甚<sup>し</sup>きつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつら

大坂  
子平

猿躰

市川風妻

桂田示峰

井ノ原  
鳥解

濱式之

中尾櫻市

中  
本

井ノ原  
秋子

指原より新入るる男爵のふ 系由作木

笠原迄はるるつゝ 小由 井つら らと習

そのまゝに傳へしは向ふ山は 宇多朝

はふりてきも嘆くうらさき 大保仙杖

新くめの面もふよや水伝む 松本氷固

水もよ遠よわぬや協の果 内神九節

このまゝくの飛脚 粟津 ちうらうら  
七師のまじり書 ちうらうら

まゝあきや活るる文字の村衛 いら半残

あ向せん茶の本を嘆神の下 西谷百成

恨あらしうらうらん ちうらうら 満水

はらうら 同うら神の ちうらうら 来川鳥葉

四七日をうけく 普音文通之句

猿の乃神のちうらやん 伊能孫州

ちうらあはらうらうら 日園友

物くちあはらうら 日定芽

信ちうらあはらうら 日宗比

みくはら 兼笠の像く ちうら 日斗從

ちうらあはらうら 日芦本

河う合くとも悲しよる水戸 七援不  
 せうその笠もこらんあられ笠 日産牧  
 車の底に水鏡のこみりの面 尾列高川  
 梅川如 一羽をふれくつふる 日素榮  
 雲のちりて光もたしむ物舟の 日九次  
 ちりちりてあふ葉もくご塚の揃 元亨  
 明く時あまの日照りや切をな 大坂伽香  
 物飼えり川也もぶる洞か みの低耳  
 文甚なり 志ぬ新し 古紙巾 伊予黄山

与

